



明日をどうするか (第ゼロ次近似から第 N 次近似へ)

2 月のごあいさつ

山内公認会計士事務所
2020 年 2 月 1 日(土)

気象庁には世界最速のスーパーコンピュータが備え付けられ、明日の天気を予報しているそうだ。天候、気圧、風向、風速、気温、湿度などの現状の大気の情報に地球上の高度、緯度、経度の空間上の座標で示され、時々、刻々の大気の変動を微分方程式で計算し、天気予報として発表している。予報の的中率は、改善に改善を重ね 90%に近いときもあり、天気については人間は未来を見通せるに近い状態になったとも言える。

企業経営においても、突如として明日があるわけではなく、今日の連続としての明日を考えることは必要不可欠なことである。

数学に近似という計算式がある。誤差の範囲をできるだけ最小に抑え、諸関数を活用して将来を計算することである。仮に、将来の情報が無ければ、あるいは、あってもその情報を利用しなければ、これは「第ゼロ次近似」である。それでは今日は通過するのみ、その日暮らしのようなもので、どのような明日になるのかはわからない。

「第ゼロ次近似」を脱し、明日を予測し、経営するためには、過去と現在のマーケット、消費動向、GDP、株価、為替、競争状況などの情報を把握し、それが経済と自社の経営に及ぼす影響を受け止め、自社の投資、人材、製品、目標等をどのように対応させるかを具体的に計算し、考えて、明日のために「第一次近似」へとレベルアップする必要がある。

これらの情報が正しければ正しいほど、そこへ将来の企業計画とイノベーションを投影すれば、企業経営の将来像をより明確に予想することができる。すなわち、「第一次近似」を超えて、予測の確度をあげ、実現性の高い将来「第二次近似」へと導き、明日を考えることができる。

天気予報に例えても、明日のデータが多くて正確なほど、結果に対する反省と修正が適切であるほど、次の予報は正確になる。

企業経営は、単なる予報ではなく、努力と決断の連続であり、その判断の対象が高度であればあるほど多くの情報が必要である。将来への見通しと発展への意欲が充分ならば、過去の経験と反省と現在の状況によって、来たるべき未来の様相をできる限り正しく予測することができる。すなわち「第三次近似」へとレベルアップした上での将来の企業経営を描ける。そのうえでもっと真実に近い情報を入力して、「第 N 次近似」、気象庁のスパコンのように、前途が把握できるほどの挑戦をすべきである。それには、コンクリートの壁の向こう側を見通すほどの努力が必要かもしれない。